

現代中国人の宗教意識・宗教的实践

—福建省莆田市における聞き取り調査およびアンケート調査から—

鄭 星 瑤

はじめに

本稿は、中国福建省莆田市における聞き取り調査およびアンケート調査から、この地の中高年女性と大学生の宗教意識および宗教的实践の実態を明らかにしたものである。中国は、20世紀に封建社会から社会主義社会へと変わり、文化大革命や改革開放期など、激動の1世紀を経験してきている。文化大革命期には宗教や儒教文化は封建的なものとして排斥され、社会主義体制下において宗教は否定され続けている。こうした歴史を経て今日の中国で暮らす人々は宗教をどう受け入れ、またどのような宗教的实践を行っているのかについて、福建省莆田市の中高年女性および大学生を事例に述べていきたい。

調査地の莆田市は福建省沿海側の中部に位置し、人口約289万人（2016年）の地方都市である。また莆田市では福建省で盛んな媽祖信仰の発祥地として知られている。媽祖は航海安全、商売繁盛、家内安全などの神として、中国東南沿海部を中心に篤く信仰されている女神であり、その性格などは仏教、道教、儒教の影響を強く受けている。莆田人は唐の時代から航海をし、各地で商売を始めていたことから、現在世界では200万人ほどの莆田出身の商人が活躍しており、そのうち中国大陸以外の地域には150万人が暮らしている〔劉 2014：3〕とされる。とくに陶器、木彫り、伝統家具等の産業は莆田商人が独占している〔劉 2014：4〕とさえいわれている。

今回莆田市において調査を行ったのは、

伝統的に中国の東南部は民間信仰が盛んな地域といわれており、また商売繁盛の神である媽祖信仰の発祥の地であることから、この地の人々の宗教意識および宗教的实践について考察を行うことに意味があると考えたからである。

聞き取り調査は2018年3月と8月に、莆田市在住の中高年女性9名を対象に行った。さらに、2018年9月に、莆田市H大学の大学生（208名）を対象とし、宗教意識および宗教的实践に関するアンケート調査を実施した。

I 福建省における民間信仰と媽祖

民間信仰が盛んな福建省では、「土地神」「財神」「灶神」「臨水夫人」「西王母」「媽祖」などがよく祀られている。「土地神」は各地の守護神であり、城隍廟で合祀されることが多く、土地廟では主神として祀られる。土地公や土地爺、福德正神とも呼ばれ、また「蕭何（秦末から前漢初期にかけての政治家）、曹参（秦末から前漢初期にかけての武将、政治家）、張旭（唐代中期の書家）、岳飛（南宋の武将）、韓愈（唐中期を代表する文人・士大夫）、薛稷（唐代の書家・画家）など、さまざまな人物が各地で土地神として奉祀されている」〔野口・田中 2004：30〕という。

「財神」は、人々に財の福をもたらす神とされ、長い間人気を集めている。「灶神」は飲食と火をつかさどる神で、司命灶神、灶君、灶王とも呼ばれる。食は生命の源であることから、灶神は人間の寿命とも密接

な関係にあると思われている。「灶神は商朝から祀られ、秦以前、門神、井神、厠神、中溜神と一緒に家庭の安全を見守る神となった」[窪 2000: 271] とされる。

「臨水夫人」は女性と子供を守る女神で、福建省福州市で生まれたと伝えられることから、主に福建省と台湾で信仰されている。その本名は陳靖姑とされ、順懿夫人、大奶夫人、臨水陳夫人とも呼ばれる。子授けや子育て、安産などのご利益で人々を惹きつける。

「西王母」は不老不死の薬を持つ女神といわれ、王母、西姥、金母元君、瑤池金母とも呼ばれるが、その俗称は福建省でよく知られている「王母娘娘」である。西王母は道教では刑罰をつかさどる厳しい女王となっているが、民間信仰では慈愛にあふれた女神である。現在、王母娘娘は城隍廟で祀られていることが多いが、民間信仰の神と合祀されているところもある。

「媽祖」は、本来航海安全をつかさどる女神である。媽祖という名前のほかに、娘媽、天妃、天妃娘娘、天后、天上聖母などの称号をもつ。初めは中国東南部の沿海地方で暮らす人々に信仰される漁業の神に過ぎなかったが、その靈験が多くの人に知られるにつれて、媽祖の信仰圏も次第に拡大して行ったのである。

媽祖は宋代に、現在の福建省莆田市湄洲島に生まれ、人々の禍福を預言し、多くの漁民を海難から救い、昇天した後も人々の安全を守っていると伝えられる。「北宋時代になると、媽祖が初めて朝廷に知られ、順済の額を賜り、それ以来、歴代の皇帝から度重なる封号を封じられ」[朱 1996: 50]、媽祖信仰は全土に広まるようになったという。

地方神から全国の神への昇格は、その靈験談が広く知られることはもちろんであるが、それと同時に時の朝廷の態度とも緊密な関係がある。媽祖はその好例である。「宣和五年（1123年）、宋の冊封使が高麗に渡

航したとき、その乗船を風波から救ったのが彼女であるとされ、その祠に宋朝から順済の額が賜与されたのが、媽祖が中央に知られた最初である」[野口・田中 2004: 79]。その後、各時代に媽祖は朝廷から封号を封じられ、また、封号の字数が徐々に増え、等級も上がっていった。こうして朝廷に重視されていくうちに、媽祖は全土での知名度が上がり、次第に道教の神統譜に列するようになったのだろう。「地方の民衆の間であたたかな靈験をもてはやされていた神が、全国的尊信を集めて道教の神統譜に地位を占めるに至る」[野口・田中 2004: 5-6] ことはよくみられることである。

多数の民間信仰の神を取り入れることにより、道教はより多くの民衆を引きつけることができ、そうしたことが道教自身の神威を高めることにも役立ったといえよう。道教が民間信仰の神を自らの神統譜に入れる方法はいくつもある。媽祖の場合は「經書の編纂」という方法で道教の神となった。經書とは、神の来歴や靈験、または教義を記述したものであり、經書に記載された神は、道教の神としてみなされる。民間信仰の神を取り入れるために、わざわざその神の經書あるいは仙伝を編纂し、道教の大蔵經（一切經）である『道蔵』の中に収録することが常である。李遠国・劉仲宇・許尚枢の『道教与民間信仰』によると、

「天妃は福建沿海地域で広く信仰されている媽祖である。天妃とは、明代、媽祖が朝廷賜わった封号である。清代になると媽祖は天后に昇格され、地位を高めた。（中略）しかも、媽祖の經書は明代の万暦の時に編集された『統道蔵』のなかに収録された。元来、媽祖は福建沿海地方に信仰された神で、道教とは何のかかわりもなかった。しかし、明代になると、媽祖は天妃と封じられてから、道教は媽祖の靈験話を集め、また、その靈験話を少し誇張し、『太上老君説天妃救苦靈験經』を著した。（中略）もともと、天妃は民間の女神であった。

しかし、経書の中で媽祖は老君が天上から地上に下界した神仙となっている。こうして、媽祖は道教の神となった」[李・劉・許 2011: 222] という。

明代に媽祖が道教の神となったということは、媽祖に与えられた封号をみるとわかる。明代の初めに、媽祖は「昭孝純正孚濟感応聖妃」「護国庇民妙靈昭応弘仁普濟天妃」と称されたが、それ以後は媽祖への封号はなかった。それは当時の海禁政策により海上での往来があまり盛んではなかったため、海の守護神である媽祖がそれほど注目されなかったからであろう。しかし、明代の最後の皇帝である崇禎帝によって、再び媽祖は「天仙聖母青靈普化碧霞元君」に封じられ、また「青賢普化慈応碧霞元君」という封号も賜わった。明代末期、媽祖に与えられた二つの封号の中には、「碧霞元君」という四文字がある。碧霞元君は、中国の山岳信仰の中心地である山東省泰山で祀られている女神である。中国の五霊山、つまり五岳とは東岳泰山、南岳衡山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山であり、泰山の主神は東岳大帝である。「碧霞元君」とはその東岳大帝の子、あるいは炳靈侯（東岳大帝の第三子）の子ともいわれ、その出生については様々の説があるが、碧霞元君と封じたのは、泰山に封禅した宋の真宗であるといい伝えられている」[野口・田中 2004: 46]。碧霞元君は子どもの授かりと病気の治療など、人々の願いを叶えてくれる女神として篤く信仰されてきた。古くから泰山と道教は密接な関係にあり、宋代にはすでに碧霞元君という名の廟が泰山に建てられていた。また宋代の真宗は「昭真祠」という祠を建て、官吏たちを派遣して祭典を行い、「天仙玉女碧霞元君」という称号を賜わった。このように、碧霞元君は宋代にすでに国家権力に承認された、道教と結びついた女神で、北の地域で篤い信仰を集めていたのである。

「元君」は道教的な名称である。『道蔵』

の第22冊の中に、「上経によって、男子は道を得れば、地位は真君を最上とするが、女子は道を得れば、地位は元君を最上とする」[李・劉・許 2011: 128] とある。媽祖の経書である『太上老君説天妃救苦靈驗経』のなかには、明代初期に媽祖が「天妃」と称されたことが書かれていることから、この文献が明代の初期あるいは中期に作成されたと考える。明代末期に媽祖が「元君」という道教的封号を賜わったのは、媽祖が民間信仰の神でありながらも、すでに媽祖の経書が作成され、道教の神として認められたことを示していることであろう。石萬壽の『台灣的媽祖信仰』の中でも、次のような記述がある。

「崇禎年間(1627-1644)に、媽祖に『元君』の封号を二回封じ、尊号が十字から十二字まで増えたのは、当時の朝廷が道術を崇拝していたからである」[石 2000: 58]。

石によると、明代末期の朝廷は道教を信じているため、媽祖に「元君」と封じたという。明代初期、朝廷は媽祖に「聖妃」、「天妃」の封号を授けたが、その後、媽祖の経書が作成され、媽祖は正式に道教の神統譜に入ったことに伴い、道教を信仰する当時の朝廷も、媽祖への封号を「元君」と改めたのである。さらに、人々の海外への移住により、媽祖信仰は海外に持ち込まれ、世界各地で媽祖廟が現れた。次第に媽祖は海の守護神という役割にとどまらず、万能神の位置に据えられるようになっていくのである。

文化大革命期には、ほかの民間信仰と同様、「封建迷信」として媽祖信仰が禁じられ、媽祖廟も壊された。その後、媽祖信仰は中国東南部を中心に徐々に回復し、近年、中国政府による「21世紀海上シルクロード政策」[URL「中国一帯一路網」]にともない、媽祖信仰は民俗文化の重要な一部分として支持されている。福建省は媽祖信仰の発祥地および中心地であることから、現在媽祖信仰はますます盛んになっている。福建省の人たちは、媽祖の誕生日である旧

暦3月23日や、媽祖の昇天日である旧暦9月9日に媽祖をまつる。そして、媽祖の生誕地である湄洲島に行って、媽祖廟で祈りをする人も多い。

Ⅱ 中高年女性の宗教的实践—莆田市在住女性への聞き取り調査から

2018年8月、筆者は莆田市で9名の中高年女性（表1）を対象に彼女たちの宗教的

表1 インフォーマント一覧

| | 年齢 | 職業 | 宗教（自己申告） |
|-----|----|-------|----------|
| Aさん | 52 | 大学職員 | 仏教 |
| Bさん | 79 | 主婦 | — |
| Cさん | 64 | 主婦 | — |
| Dさん | 60 | 主婦 | — |
| Eさん | 53 | 主婦 | — |
| Fさん | 50 | 観光ガイド | なし |
| Gさん | 65 | 主婦 | 仏教 |
| Hさん | 53 | 図書館職員 | 仏教 |
| Iさん | 52 | 中学校教師 | 仏教 |

1 中高年女性（インフォーマント）の宗教的実践

a) Aさん（52歳）は、莆田市内に住んでいる大学の職員である。彼女は自分が仏教徒と思っており、仕事が忙しいため近くの梅峰寺しか参拝できないが、城隍廟と文峰宮にも参りたいと言っている。城隍廟は道教の廟、文峰宮は媽祖廟だが、彼女はそれが仏教の寺だと思っているようである。Aさんは媽祖も信仰しており、媽祖に祈る内容は普段の祈りの内容と変わらず、家族の安全や健康、願いの成就である。また重要な願いがある時は媽祖の生誕地の湄洲島に行って祈ることもある。彼女自身は媽祖が民間信仰の神であり、道教の神ではないと思っている。

Aさんの家では旧暦12月31日に祖先祭

実践について聞き取り調査を行った。また、2018年10月と11月にはEメールやビデオ通話で9名のインフォーマントに追加調査をした。今回インフォーマントを中高年の女性に絞ったのは、男性や若者に比べてこの年齢層の既婚女性のほうがより熱心に宗教的実践を行うだろうと考えたからである。聞き取り調査の内容は主に彼女たちが日常的に行う宗教的実践および宗教に対する考え方である。

祀を行い、毎年清明節（旧暦4月5日前後）や冬至に墓参りをする。これは福建人の一般的な習慣である。

b) Bさん（79歳）は莆田市下黄村に住んでいる主婦である。家には、この地域のほかの家と同様、土地公の神棚が置かれており、毎月2日と16日（旧暦）には土地公を祀る。2日と16日（旧暦）は、莆田市では「打齒祭」と呼ばれる日である。『現代漢語詞典』によると、「打齒祭」とは元々毎月初旬と中旬に肉料理を食べることを指す言葉だったが、後にはたまにご馳走を食べることを指すようになったという。莆田人の中には「打齒祭」を毎月にする人もいるが、1年のうち最初と最後の「打齒祭」だけをやる人も多い。Bさんは、仏、神、魂の存在を信じており、観音や菩薩の誕生日には

地元の廟に参拝し、また冬至の日には家族と共に墓参りをする。

c) Cさん(64歳)は莆田市白沙鎮に住んでいる主婦である。彼女の宗教的实践は村の習俗に従って行っているようであるが、寺や廟に参拝することはあまりなく、祖先祭祀を大事にしている。

d) Dさん(60歳)は莆田市秋芦鎮で暮らす主婦である。彼女は自分が仏教徒だとは思っておらず、仏教など宗教についても全然知らないと言っていた。しかし、毎年清明節の日に墓参りをする。Cさんと同様、Dさんは自分の村の習俗に沿った形で宗教的实践を行っているという。

e) Eさん(53歳)は莆田市内在住の主婦である。彼女は清明節、端午節、中元節、大晦日の日には故郷に帰って祖先を祀り、冬至の日には墓参りをする。彼女はいつも家族の健康、家内安全を祈り、「心のなかで神を信じていれば、神が守ってくれる」と話している。Eさんは媽祖を民間信仰の神として認識しており、道教の神とは考えていない。また、媽祖の靈驗は認めているが、ふだん媽祖を祀る習慣はないようである。

f) Fさん(50歳)はマカオに住んでいる観光ガイドである。莆田出身だが10年程前にマカオに移住した。彼女は正月のときだけ祖先を祀り、いつも家族の安全や健康を祈る。マカオにいるため、清明節や冬至の日に莆田に戻ることができず、墓参りができないことが多い。

g) Gさん(65歳)は莆田市涵江区に住んでいる主婦である。家の二階には媽祖と観音の神棚が置かれており、毎日ポエ(占いの道具のひとつ)を投げてその日に媽祖がいるのか、または観音がいるのかを確認してからその神に祈る。娘の大学入学試験や就職活動、出産のときなど、家族にとって重要な時期やなにかを決めるときは必ず媽祖や観音に教えを乞う。媽祖や観音に教えを乞う前には必ず媽祖や観音と会話を交わすという。彼女の願い事も家族の安全と

健康であり、後はその時の物事が順調に進むことを祈る。

h) Hさん(53歳)は莆田市内在住の図書館の職員である。彼女は仏教徒と言っており、神や魂などの存在を信じている。そのためか、道教や民間信仰への抵抗感はなく、媽祖や土地公、財神などの神を祀ることもある。また、Hさんは四年前から、浙江省にある普陀山へ年に一回参拝に行く。普陀山は中国で仏教の聖地として知られており、観音菩薩が祀られている。彼女の祈りの目的は家内安全、家族の健康である。

i) Iさん(52歳)は莆田市内に住んでいる中学校の教師である。彼女は自分が仏教徒と話していた。Iさんは媽祖が民間信仰の神であり、道教の神でもあるということを知っている。媽祖、土地公、財神などの民間信仰の神々を熱心に祀る人ではないが、それらを信じていないわけでもない。また神の名前とそれぞれのご利益をよく知っている。

今回のインフォーマントはすべて女性で、50代が5名、60代が3名、70代が1名である。数としては必ずしも十分ではないが、この9名の女性への聞き取り調査から、いくつかの特徴が見えてきたと考えられる。一定の教育を受けて職業を持っている50代の女性たちは、宗教に関心を持っているかどうかに関わらず、自分が仏教徒だと思う傾向があるようである。そして、彼女らは仏教徒であっても媽祖などの民間信仰の神々に対して抵抗感を抱いてはいない。60代女性の宗教的实践は、基本的に自分の住んでいる地域の習俗に沿った形で行われていることがわかる。70代の女性は一人しかいなかったが、60代の人と傾向が類似している。今回の聞き取りを通じて、とくに中高年女性が祖先祭祀を含めた年中行事を大事に守っていることがわかる。その根底には中国の儒教思想があるように思われる。

Ⅲ 大学生の宗教意識・宗教的实践－H大学（莆田市）在学生へのアンケート調査から

a) 調査の目的と対象

本アンケート調査の目的は、中国東南部の地方都市に住む大学生の日頃の宗教的实践および宗教に対する考えを明らかにすることである。大学生を調査対象にしたのは、高等教育を受けている若者の宗教的实践および宗教に対する考えを調べるためである。またH大学の在学生を調査対象にしたのは、この大学が莆田市にある唯一の大学であること、莆田市が筆者の出身地で調査に協力してもらえる人たちがいるためである。

b) 調査方法

2018年9月3日(月)と9月4日(火)の二日間において、H大学の教員の協力を得て、授業の前にアンケート質問紙を配り、学生たちに回答してもらってその場で回収した。210名の大学生にアンケート質問紙を配布し、208部を回収できた(回収率:99.05%)。そのうち200名が漢族で、8名が少数民族である。

c) 質問項目

設問は性別、出身地、民族名の三つの基本情報を含めた29項目からなっている。これらは宗教への関心、日頃の宗教的实践、宗教に対する考えといった三つのキーワードを軸に、現代の大学生の宗教意識と宗教的实践を問うものが中心となっている。質問紙の日本語訳の全文は参考資料として末

部に示した[資料1:中国の大学生の宗教意識・宗教的实践に関するアンケート調査]。以下、問番号(QNo.)はこの質問紙の番号による。

d) 結果と分析

〈男女総合〉

当初漢族の大学生と少数民族の大学生を二つのグループに分けて、アンケート調査の集計結果を分析しようとした。しかし、漢族と少数民族の回答にあまり差異が見られず、また少数民族は8名のみで数として十分ではないため、漢族の大学生200名のみを分析の対象にした。さらに、200名のうち男子学生(35人)と女子学生(165人)の回答を比較し考察を行っており、最後に、回答間のクロス集計を行った。

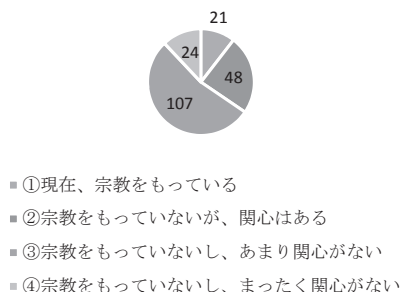
200名の学生(漢族)の質問への回答の結果は以下の通りである。

問4 宗教に対する関心の有無

図1が示すように、200名のうち「宗教をもっていないし、あまり関心がない」と回答した学生が半数を超えて53.5%(107人)である。その次に、「宗教をもっていないが、関心はある」を選んだ学生は24.0%(48人)である。「宗教を持っておらず、まったく関心がない」と回答した学生は12.0%(24人)である。宗教に「あまり関心がない」と「まったく関心がない」を合わせると65.5%(131人)を占めており、もっとも多い。また、現在、宗教をもっている大学生はもっとも少なく10.5%(21人)である。

図1

Q4 宗教に対する関心の有無 (人)



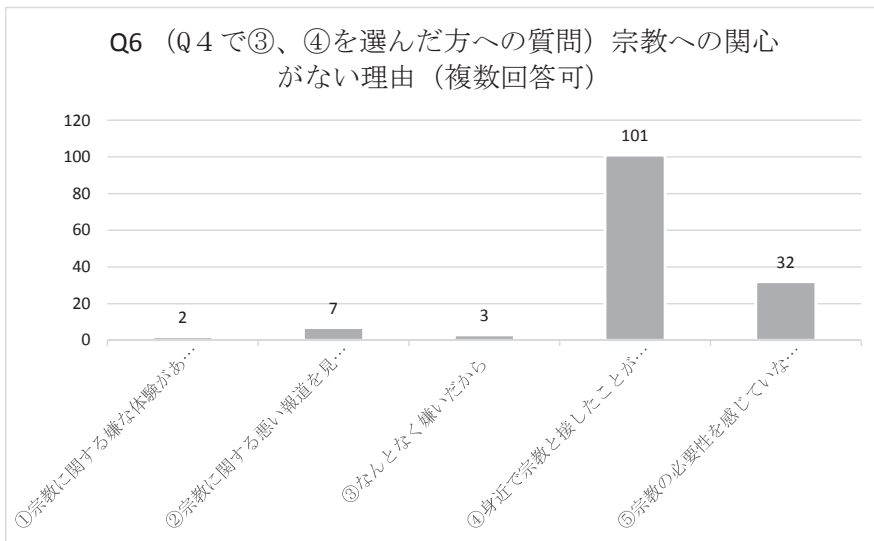
問6 (Q4で③、④を選んだ方への質問)

宗教への関心がない理由(複数回答可)

問4で、「宗教をもっていないし、あまり関心がない」と「宗教をもっていないし、まったく関心がない」と選んだ学生は計131人である。図2によると、関心がない理由として「身近で宗教と接したことがないから」を選択した人が圧倒的に多く101人である。その次に、「宗教の必要性を感じないから」を選んだ学生は32人いる。この二つは大学生が宗教への関心が薄いことの主な原因である。福建省を含めて中国

の各地域には寺院や廟、教会などの宗教的施設が多くあるはずであるにもかかわらず、多数の学生が宗教に関心がない理由として「身近で宗教と接したことがないから」をあげている。それは、家族や知人など身近な人に特定の宗教をもっている人がいないことを意味しているのかもしれない。こうした背景には、学校教育において宗教的なものと関連した教科がなく、また共産党による宗教否定の歴史が長かったこととも関係しているのであろう。

図2

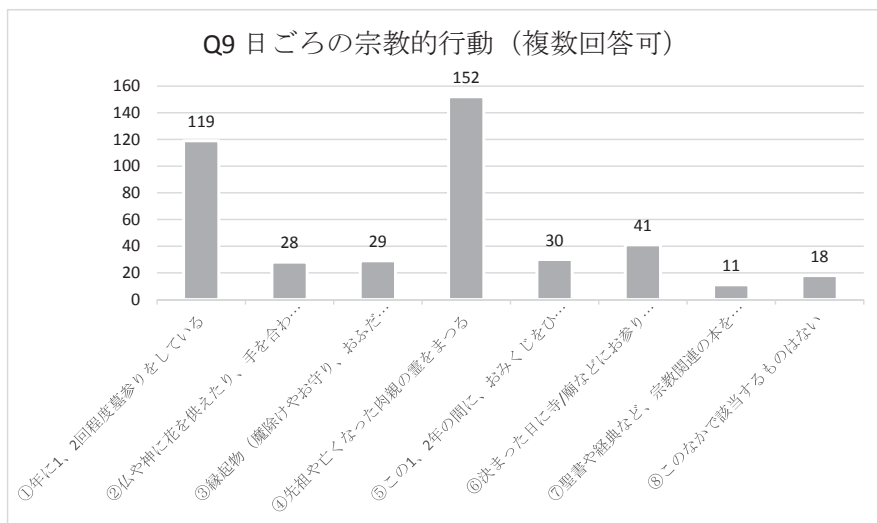


問9 日ごろの宗教的実践（複数回答可）

問9は、現代の大学生の日頃の宗教的実践を問うものである。図3が示すように、200名のうち「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」を選んだ学生が152人を占めており、もっとも多い。その次に多い

のが「年に1、2回程度墓参りをしている」という回答で、119人の学生が選択している。ほかの6つの選択肢を選んだ学生は各50人未満である。こうした結果から、回答者の大学生の宗教的実践は祖先祭祀が中心となっているといえる。

図3

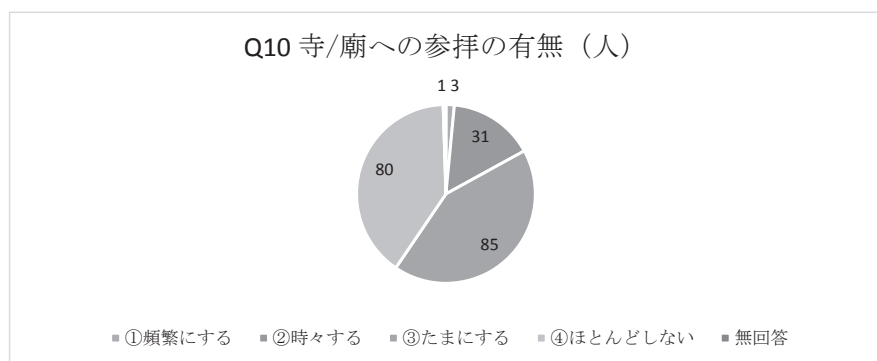


問10 寺／廟への参拝の有無

寺や廟への参拝を「たまにする」を選んだ学生がもっとも多く42.5%（85人）を占めている。その次に、「ほとんどしない」が40.0%（80人）、「時々する」が15.5%（31

人）の順となっている。「頻繁にする」を選んだのは3人のみである。参拝を「ほとんどしない」と回答した人を除けば、頻度の差はあるが寺や廟を参拝する人が59.5%（119人）もいることがわかる。

図4



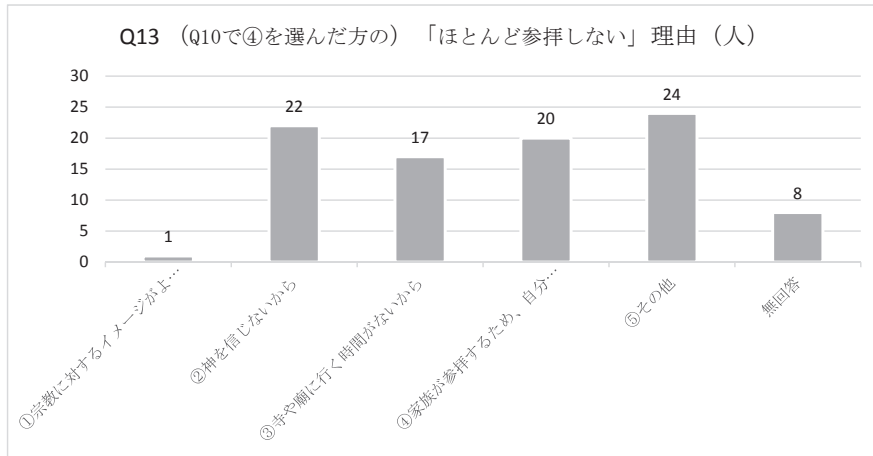
問13 (Q10で④を選んだ方への質問)

「ほとんど参拝しない」理由

問10で④の「ほとんどしない」を選択した学生は80人いる。「ほとんど参拝しない」理由としてもっとも多いのは「その他」であり、24人がこれを選んだ。「その他」の具体的な内容は不明だが、参拝に興味が

ないからではないかと推測される。「宗教に対するイメージがよくない」、「神を信じていないから」という比較的消極的な答えを選んだ学生はそれぞれ1人と22人である。「寺や廟に行く時間がないから」と「家族が参拝するため、自分は行かなくてもいい」を選択した人はそれぞれ17人と20人である。

図5

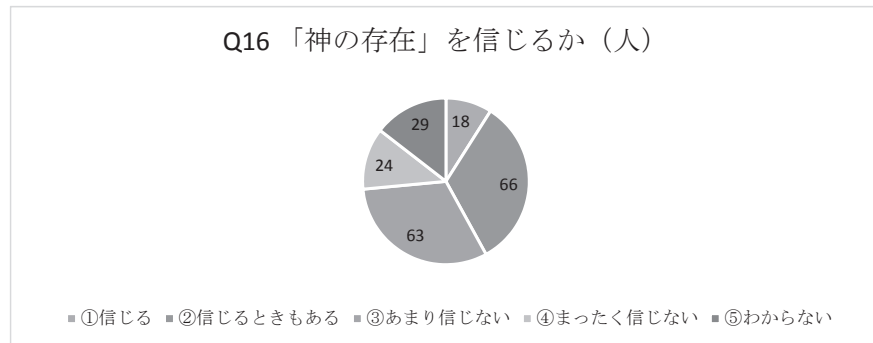


問16 「神の存在」を信じるか

神の存在を「信じるときもある」を選んだ学生はもっとも多く33.0% (66人)である。「あまり信じない」が31.5% (63人)、「わからない」が14.5% (29人)、「まったく信じない」が12.5% (24人)である。ま

た、神の存在を信じる学生はもっとも少なく9.0% (18人)である。神の存在を「信じる」・「信じるときもある」を合わせると42.0% (84人)で、「あまり信じない」と「まったく信じない」を合わせると43.5% (87人)であり、その差はわずかである。

図6

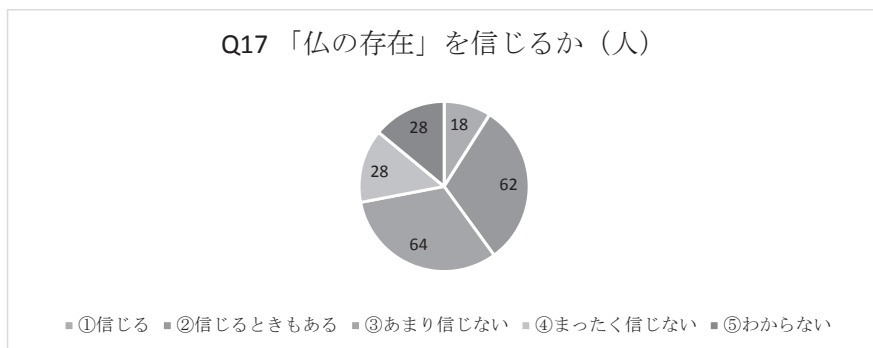


問17 「仏の存在」を信じるか

仏の存在を「あまり信じていない」を選んだ学生はもっとも多く32.0% (64人)である。その次に、「信じるときもある」が31.0% (62人)、「わからない」が14.0% (28人)、「まったく信じていない」が14.0% (28人)である。また、仏の存在を信じる学生はもっとも少

なく9.0% (18名)である。仏の存在を「信じる」・「信じるときもある」を合わせると40.0% (80人)で、「あまり信じていない」・「まったく信じていない」を合わせると46.0% (92人)であり、その差はそれほど大きくない。ただし、問16と比べると、神より仏の存在を信じていない人の割合が若干高い。

図7

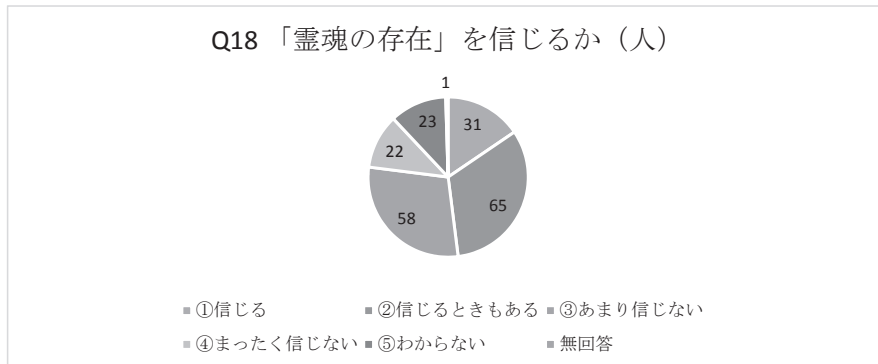


問18 「霊魂の存在」を信じるか

霊魂の存在を「信じるときもある」を答えた学生はもっとも多く32.5% (65人)である。その次に、「あまり信じていない」が29.0% (58人)、「信じる」が15.5% (31人)、「わからない」が11.5% (23人)である。また、霊魂の存在をまったく信じていない学生はもっとも少なく11.0% (22人)である。無回答の学生は一人である。霊魂の存在を「信じる」と「信じるときもある」を合わせると48.0% (96人)で、「あまり信じていない」と「まっ

たく信じていない」を合わせると40.0% (80人)である。問16と問17においては、神や仏の存在を「信じていない」人の割合が「信じる」人より高かったのに対し、問18においては「信じる」人の割合が「信じていない」人より高かったのは興味深い。このように回答者の半数近くが霊魂の存在を否定しない傾向は、大学生が祖先の霊を重視し家庭で祖先祭祀を行ったり、墓参りをしていることと関係しているのかもしれない。

図8



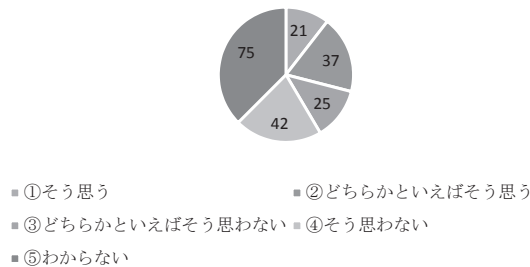
問21 「神や仏を粗末にしたり、死者の供養をしないと崇る」と思うか

神や仏を粗末にしたり、死者の供養をしないと崇るということについては37.5% (75人) の人が「わからない」と答えた。その次に、「そう思わない」を選んだ人は21.0% (42人)、「どちらかといえばそう思う」が18.5% (37人) である。また、「どちらかといえばそう思わない」を選択した

人は12.5% (25人)、「そう思う」は10.5% (21人) である。神や仏を粗末にしたり、死者の供養をしないと崇るということについて「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると29.0% (58人) で、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせると33.5% (67人) となり、死者の供養と崇りについて否定的な見解をもつ人がそうでない人より若干多い。

図9

Q21 「神や仏を粗末にしたり、死者の供養をしないと崇る」と思うか (人)



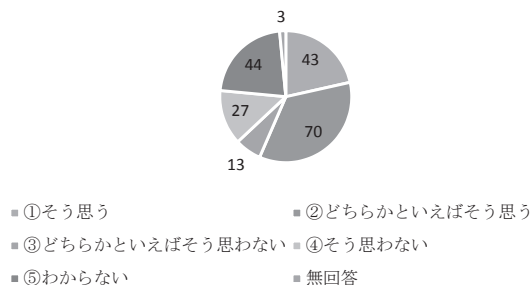
問26 「信仰は、死に直面した時の心の支えになる」と思うか

図10が示すように、死に直面した時、信仰が心の支えになるかという問に対し「どちらかといえばそう思う」と回答した学生がもっとも多く35.0% (70人) を占めている。「わからない」と答えた人は22.0% (44人) である。「そう思う」を選んだ人は21.5% (43人) であるのに対して、「そう思わない」と回答した人は13.5% (27人) である。また、「どちらかといえばそう思わない」の人は6.5% (13人) である。「そ

う思う」・「どちらかといえばそう思う」を合わせると56.5% (113人) で、「そう思わない」・「どちらかといえばそう思わない」が20.0% (40人) であり、「信仰は、死に直面した時の心の支えになる」と考えている人がそう思わない人の3倍近く、また全体の半数以上いることがわかる。こうした結果から、回答者の半数以上が、神や仏や靈魂の存在を信じるかどうかとは別に、少なくとも死と関連した局面においては信仰を肯定的に捉えているといえよう。

図10

Q26 「信仰は、死に直面した時の心の支えになる」と思うか (人)



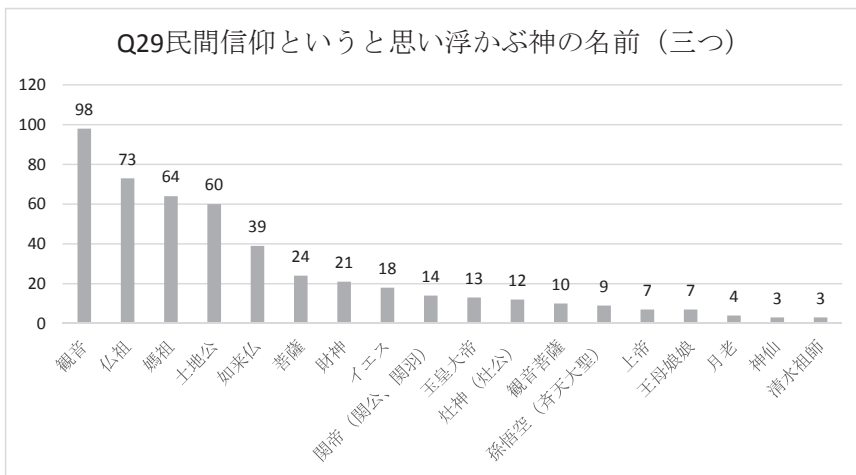
問29 民間信仰というと思ひ浮かぶ神の名前（三つ）

中国の大学生は民間信仰についてどのようなイメージを持っているかを考察するため、自由記述という形でこの質問を設けた。回答の集計の結果、民間信仰というと思ひ浮かぶ神の名前として多かったのは、観音（98人）、仏祖（73人）、媽祖（64人）、土地公（60人）である。その次は、如来、菩薩、財神、イエス、関帝（関公、関羽）、玉皇大帝、灶神（灶公）、観音菩薩の順となっている。ほかにも、孫悟空（斉天大聖）、月老といった中国の神話の中によく出てくる人物をあげた人もいる。また、一人、二人があげたものとしては牛魔王、地藏王、二郎神、猪八戒などがある。24人の学生は無回答である。

興味深いのは観音、仏祖、如来仏、菩薩、観音菩薩のような仏教由来の存在が上位に入っている点である。大学生たちのこうした回答をどう理解すればいいのだろうか。まず考えられるのは、観音、仏祖、菩薩などが長い間人々に親しまれてきており、普段から頻繁に祀られているため、その結果、民間信仰の神々として認識されているということである。中国ではよく「観音

娘娘」が祀られているが、「観音」は仏教の神で、「娘娘」は道教的言葉である。「元君が、道教の高位の女神の封号もしくは称号なのに対して、娘娘は一般的に女神をあらわすよび名であるといつてよい。だから、観音さんを女神とみる中国の人々のあいだでは、観音娘娘というよび方もあった」[窪徳忠 2000:216]。こういった状況はまさに中国における仏教と民間信仰との混淆的な姿を表しているとみていいであろう。媽祖をあげている人も64人いるが、それは媽祖の出身地が今回調査を行った莆田市であり、また、近年、H大学では媽祖に関する授業や活動が行われているため、多くの大学生が媽祖のことを知っているのも当然である。しかし、地元出身の万能神である媽祖より、観音と仏祖の方が民間信仰の上位にあげられていることは驚きである。土地公、関帝、玉皇大帝、灶神といった道教系の神々をあげている人も結構多く、またキリスト教の開祖であるイエスの名を書いた人も18人いる。イエスがなぜ民間信仰の神として理解されているのかについては、今回のアンケート調査の結果だけでは説明が難しく、さらなる調査が必要であろう。

図11



次は、アンケート調査の問4から問28までの結果を男女別にみることにする。

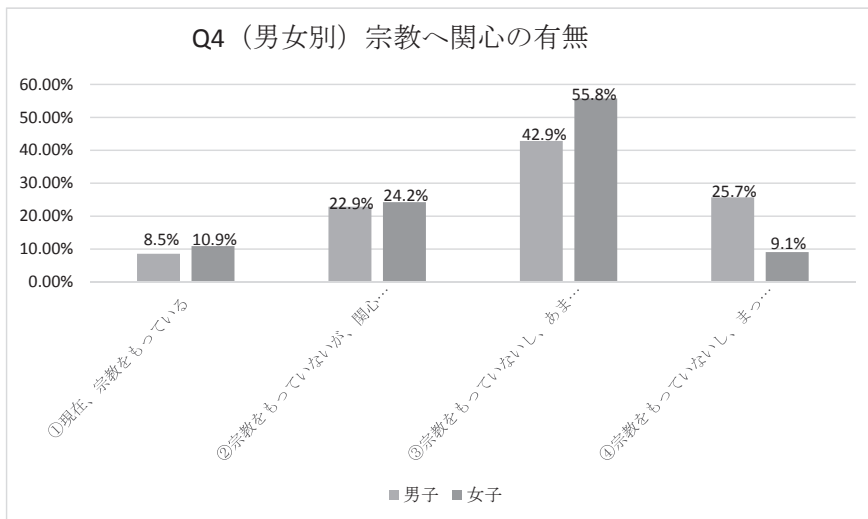
〈男女の比較〉

問4 宗教へ関心の有無

図12が示すように、「現在、宗教をもっている」と「宗教をもっていないが、関心はある」と答えた男子学生と女性学生の割合はそれほど差が見られない。「宗教をもっていないし、あまり関心がない」を選んだ男子は42.9%（15人）、女子は55.8%（92

人）を占めており、女子の方が13%ほど多い。逆に「宗教をもっていないし、まったく関心がない」を選択した男子が25.7%（9人）であるのに対して、女子は9.1%（15人）しか占めておらず、男子のほうが17%弱高い。しかし、「あまり関心がない」と「まったく関心がない」を合わせると男子は68.6%（24人）、女子が64.9%（107人）となっており、大差はない。

図12

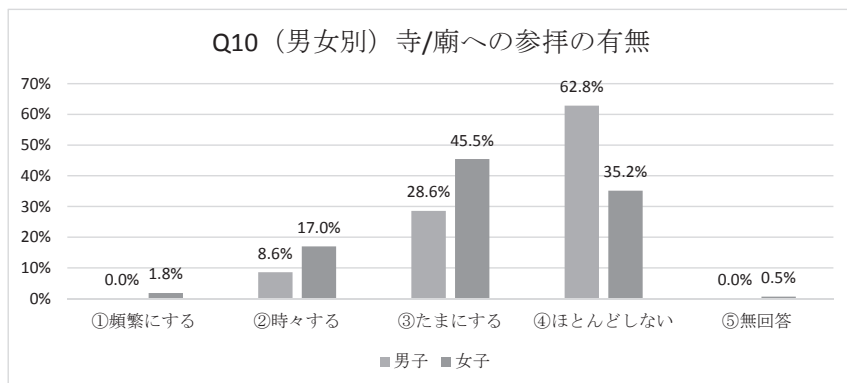


問10 寺／廟への参拝の有無

図13が示すように、普段、頻繁にお寺／廟に参拝する女子は1.8%（3人）であるが、男子はゼロである。「時々する」と回答した男子は8.6%（3人）、女子は17.0%（28人）また、「たまにする」と答えた男子は28.6%（10人）、女子はそれをはるかに超えて45.5%（75人）である。頻度に関

係なく寺や廟に参拝する人の合計は男子が37.2%（13人）、女子が64.3%（106人）で、やはり女子の参拝者が圧倒的に多いことがわかる。また問6で「宗教の必要性を感じない」と答えた男子が半数以上に達していることは、62.8%の男子が寺や廟にほとんど参拝しないことでも裏付けされているのである。

図13



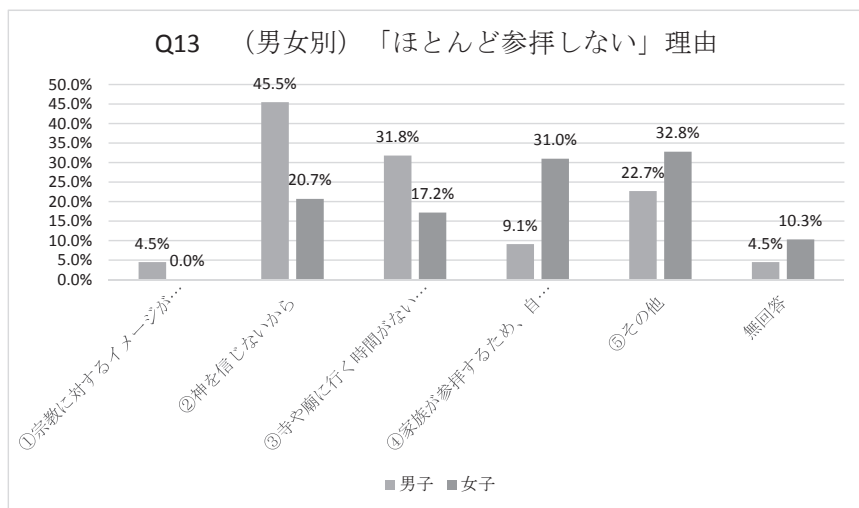
問13（Q10で④を選んだ方への質問）

「ほとんど参拝しない」理由

図14が示すように、男子は「ほとんど参拝しない」理由として、「神を信じないから」「寺や廟に行く時間がないから」「その他」が上位3に入っている。一方、女子は「その他」「家族が参拝するため、自分では行かなくてもいい」「神を信じないから」が上位を占めている。「その他」のところに「お寺や廟の線香の匂いが苦手」と書いて

た人もいた。「神を信じないから」および「寺や廟に行く時間がないから」と回答した割合は、男子の方が高い。これは、問6で、男子の「宗教の必要性を感じない」の回答率が高いという結果と一致している。また「家族が参拝するため、自分では行かなくてもいい」という回答は女子が男子より3倍以上多く、女子のほうが宗教のことを家族任せにしているきらいがあるようである。

図14

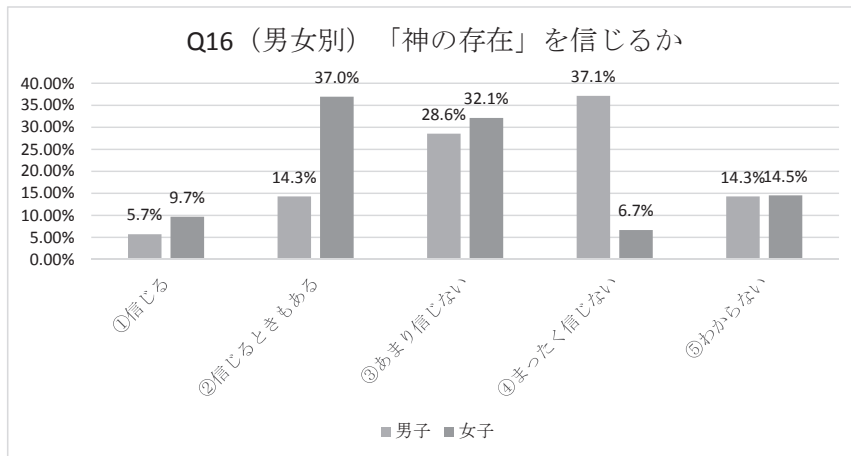


問16 「神の存在」を信じるか

図15が示すように、神の存在を「信じる」と回答した女子は男子を4.0%上回り、また「信じるときもある」は男子を20%以上上回る。「まったく信じない」と答えた

男子が37.1%（13人）いるのに対して、女子は6.7%（11人）のみである。この結果から、男子より女子のほうがは神の存在に対して肯定的であることがわかる。

図15

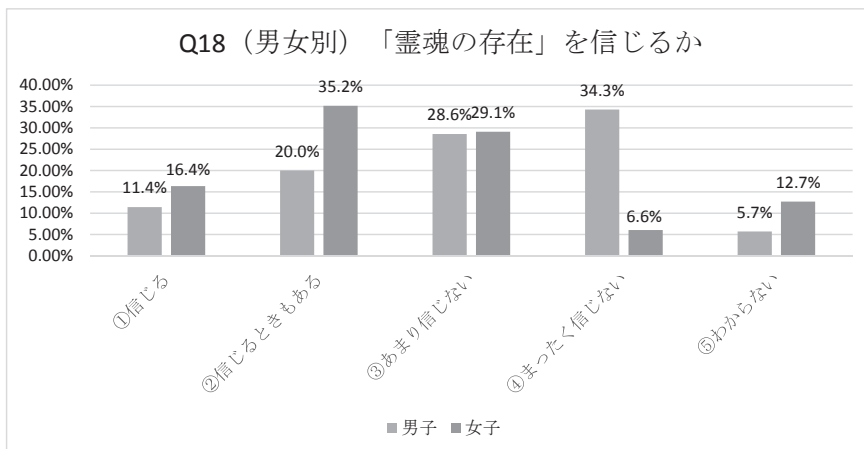


問18 「靈魂の存在」を信じるか

図16によると、靈魂の存在を「信じる」女子は男子を5.0%上回り、「信じるときもある」女子は男子を15.2%上回る。また、「まったく信じない」と回答した男子は34.3%（12人）を占めているのに対して、女子は6.1%（10人）のみである。問16（神）および問17（仏）と比較すると、靈魂を「信じる」「信じる時もある」の割合が男（31.4%）女（51.4%）ともに高く、「あま

り信じない」「まったく信じない」の割合は低くなっている。「神」や「仏」よりも「靈魂」を信じる割合が高いのは、祖先祭祀の影響によるものとみていいであろう。とくに女子のほうの割合が高いのは、問9において、男子より女子のほうが「祖先の霊をまつる」「お墓参りをする」といった宗教的実践を積極的に行っていることとも矛盾しない結果といえよう。

図16



以上、200名の大学生を男女別に分けて回答の結果を比較して述べた。アンケート質問紙の問4から問28までの回答結果を男女別にまとめると以下の通りである。

回答者の大学生のうち特定の宗教をもっている人は少なく、男女ともに宗教への関心が薄い。男女の主な宗教的实践は墓参りと祖先祭祀である。しかし、「宗教に対する考え方」、つまり問16から問27までの回答結果をみると、男子と女子は神、仏、霊魂などに対する考え方が異なることがわかる。男子は否定的な選択肢を選ぶ傾向があるのに対し、女子は「わからない」と答えた人が多い。こうした違いが、男女の考え方の違いによるものか、それとも各自の家庭環境や教育の違いによるものかなどについて明らかにするためには聞き込み調査が必要と思われる。

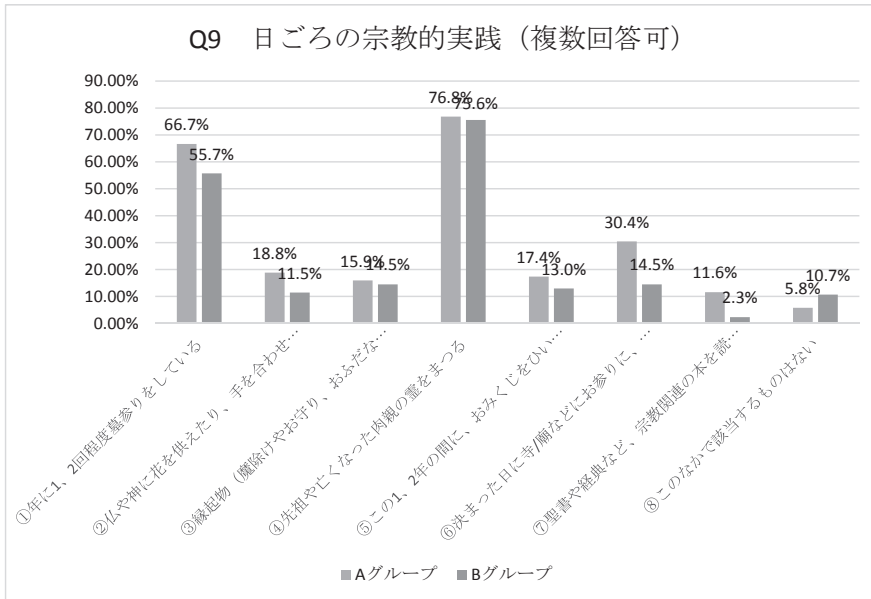
〈項目間のクロス集計〉

ここでは、問4をベースにして、関連項目間のクロス集計を行ってみたい。問4は宗教に対する関心度をきくものである。「現在、宗教をもっている」と「宗教をもっていないが、関心はある」を選んだ69人の学生をAグループ（関心ありグループ）とし、「宗教をもっていないし、あまり関心がない」と「宗教をもっていないし、まったく関心がない」を選んだ131人の学生をBグループ（関心なしグループ）とする。また、AグループとBグループの学生たちは問9（日頃の宗教活動）、問10（寺／廟への参拝頻度）、問16（神の存在を信じるか）、問17（仏の存在を信じるか）、問18（霊魂の存在を信じるか）、問19（死後の世界はあると思うか）、問20（人は死後生まれ変わるか）、問26（信仰は死に直面した時の心の支えになるか）の8項目にそれぞれどのような回答をしたかをみることにする。こうしたクロス集計によって、大学生の宗教への関心度と、宗教的实践・宗教についての考え方とが一致しているか、あるいは矛盾しているかを考察したい。

問9 宗教的实践（複数回答可）

図17によると、宗教に関心ありのAグループと関心なしのBグループの日頃の宗教的实践は項目によっては大差がないようにみえる。「祖先や亡くなった肉親の霊をまつ」という回答が両方とも一位で、76%前後の高い割合を占めている。次に「年に1、2回程度墓参りをしている」と回答した学生も過半数である。二つのグループ間で最も差が大きいのは「決まった日に寺／廟などにお参りに、または教会に礼拝に行く」や「聖書や経典など、宗教関連の本を読んでいる、または読んだことがある」の回答で、関心ありのAグループより関心なしのBグループのほうがかなり低い。それは、Aグループの学生のなかに特定の宗教を持っている人（21人）が含まれているためと考えられる。しかし、総合的に見れば、AグループとBグループとの間に各回答の割合にそれほど差はなく、宗教に関心がある学生もない学生もある程度宗教的实践を行っていることがわかる。この結果はおそらく家庭での宗教活動のあらわれであって、各自の宗教活動の選択の結果ではないように思われる。ただし、「このなかで該当するものはない」以外の項目は、AグループはBグループよりも割合が高く、普段Aグループの学生たちがより積極的に宗教的行動を取っている環境にあることを示しているのであろう。

図 17

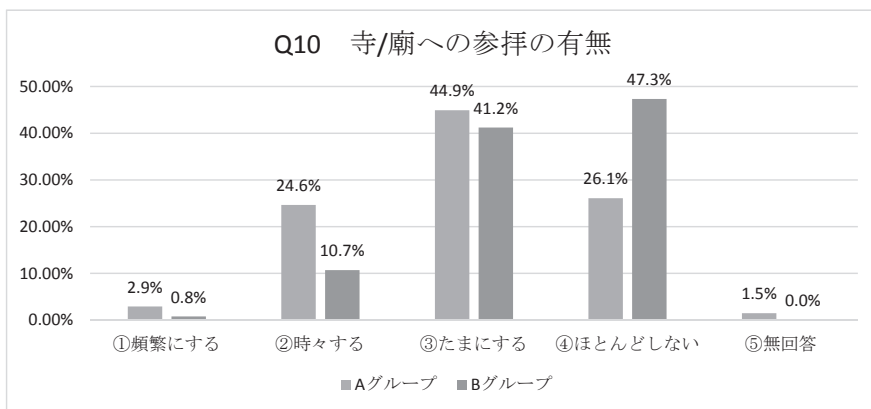


問 10 寺 / 廟への参拝の有無

図 18 が示すように、「頻繁にする」と回答した A グループの人は 2.9%（2 人）を、B グループの人は 0.8%（1 人）を占めている。「時々する」を選んだ A グループの人は 24.6%（17 人）で、B グループの人は 10.7%（14 人）である。また、「たまにする」を選んだ A グループと B グループの学生の割合はほぼ同じで、4 割台（A グループ 44.9%・31 人、B グループ 41.2%・54 人）である。前の三つの選択肢は、A グループ

が B グループより高い割合を示しているが、「ほとんどしない」の回答においては B グループの割合が A グループを 2 割ほど上回る。A グループの学生の 1.5% は無回答である。この集計結果によると、A グループのほうが B グループより寺や廟をよく参拝をする傾向があるといえるが、それは決して宗教にあまり関心がないからといって参拝をしないとか、逆に関心があるからといって常に参拝するということを意味しているわけではないのである。

図 18

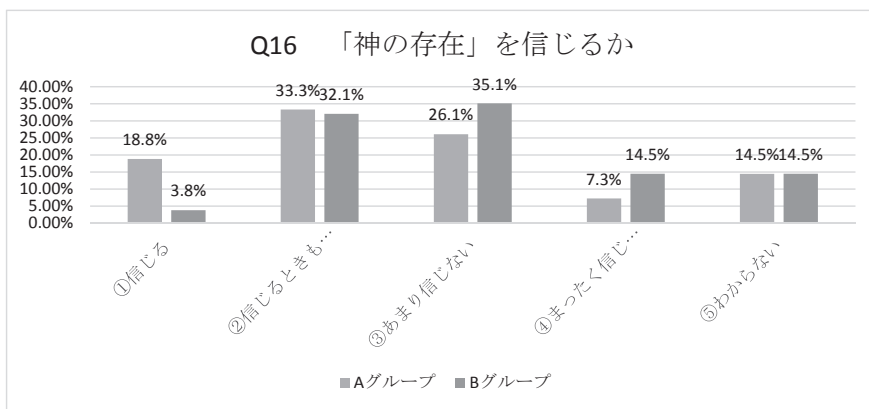


問16 「神の存在」を信じるか

図19は「神の存在」に関する質問だが、Aグループでは18.8%（13人）の人が神の存在を「信じる」と回答したのに対して、Bグループでは3.8%（5人）のみが「信じる」と回答した。また、「信じるときもある」においてはAグループとBグループの割合は33.0%前後で、ほぼ同じである。さらに、「あまり信じない」と「まったく信じない」を選んだBグループの学生はAグループに比べて、16.2%高い。そして、両

グループともに14.5%の人が「わからない」と回答した。このデータによると、AグループがBグループより、神の存在を信じる傾向があることがわかる。しかし、こちらも問9（日頃の宗教活動）、問10（寺／廟への参拝頻度）と同様に、宗教に関心があっても神の存在を信じなかったり、関心がなくても神の存在を信じることがあるというような、やや矛盾しているようにもみえる回答であり気になる。

図19



以上で述べたように、Aグループのほうがより頻繁に、またさまざまな宗教的实践を行っており、お寺や廟に参る頻度も高いことがわかる。また、Aグループのほうが神や仏、霊魂の存在に対して肯定的な考え方を持っている傾向があると指摘できる。しかし、Bグループも「宗教に関心がない」または「宗教にあまり関心がない」と言っている割には、多くの学生が宗教的实践を行っており、また寺や廟にも参拝をしている。さらに神、仏、霊魂の存在、輪廻転生といった項目に関してもかなりの人が肯定的な回答をしている。こうした回答結果を「矛盾」しているとみるよりは、ある意味での中国の大学生や若者の宗教や信仰における混濁的な姿と捉えるべきなのかもしれない。

Ⅲ 莆田市の中高年女性と大学生の宗教意識・宗教的实践における特徴

今回9名の中高年女性への聞き取り調査からは、一定の教育を受けて職業を持っている女性たちは仏教に親しみを感じ、自分が仏教徒であると自覚する傾向があることがわかった。しかし、彼女たちは民間信仰の神々に対して抵抗感をもっているわけではない。日常的に民間信仰の神々を拝むこともあり、家の神棚にはこれらの神々が仏教の神々と合祀されることもある。一方、あまり学校教育を受けていない女性たちは普段から民間信仰の神々への祈りを含めて比較的熱心に宗教的实践を行っているが、本人たちはそれが地元の習俗であると思っている。この地に住む中高年女性たちにおいて、異なる宗教に属する複数の神々を同時に祀ることはよくあることであり、また

それぞれの神の宗教的ルーツを明確に認識することは必ずしも重要なことではないのかもしれない。彼女たちにとって大事なのは神々のご利益であり、祀る神が複数であればご利益も多くなるという考えのようである。こうしたことから、莆田市で暮らす中高年女性たちの宗教的实践および宗教意識においては、学歴に関係なく仏教や道教、民間信仰などの混淆的姿をみることができる。このような状況は、この地域だけでなく中国内の他地域や台湾などでも容易に観察されることであろう。

莆田市に位置する H 大学の在学学生を対象に行ったアンケート調査の回答結果をみると、ほとんどの人が特定の宗教を持っておらず、また宗教に対してあまり関心をもっていない人が圧倒的に多い。そのためか、宗教的实践は、個人というより家族単位で行う祖先祭祀や墓参りが中心となっている。民間信仰の神々の名前をきかされると、観音や仏祖をあげた人が最も多く、道教の神々を書いた人も相当数いる。これをどう考えればいいのだろうか。この地域において観音や仏祖が民間信仰化していることの現れなのか、それとも単純に「民間信仰」の意味を「民間（民衆）の信仰」と理解しての回答なのか、いずれにいてもアンケートの回答だけではわかりにくく、さらなる調査が必要な部分であろう。

200名の漢族の大学生の回答を男女別に分けて考察した結果、男女ともに宗教への関心度が低く、男子が宗教一般に対して消極的な態度をみせるのに対し、女子はより頻繁に宗教的实践を行っていることがわかる。問4（宗教への関心の有無）への回答を軸に、宗教に関心のある A グループとあまり関心のない B グループに分けて、8項目に対するそれぞれのグループの回答とクロス集計を行った。その結果、当然ながら A グループは B グループより宗教的实践を行っており、宗教に対しても肯定的な考えをもっていることがわかった。しかし、

B グループの中にも宗教的实践を行っている者もあり、宗教に対してみんなが否定的な態度を示しているわけではない。また逆に、A グループの中にも参拝に関心がなかったり、神の存在を信じない学生がいる。

おわりに

本稿では、現代中国における人々の宗教意識と宗教的实践を理解するために、福建省莆田市において中高年女性を対象に聞き取り調査を、また同市 H 大学の在学学生を対象にアンケート調査を行った。集めた資料の考察を通じて、わかったことは次のような点である。この地域に住む中高年女性たちは、個人によって多少の違いはあるものの、おおむね宗教的ルーツの異なる複数の神々を祀り、また祖先祭祀を含めた年中行事を大事に守っている。

中国では、成立宗教と民間信仰との習合現象が顕著といわれる。中でもとりわけ大衆道教と民間信仰ははっきり区分することができないほど非常に緊密な関係を持っているとされる。莆田市の中高年女性の上記のような宗教的实践の背景には、一般に中国でみられる信仰の習合現象があるといえよう。

莆田市 H 大学の在学学生を対象に行ったアンケート調査の結果を見ると、ほとんどの人が宗教を持っておらず、また宗教への関心度がきわめて低い。彼らの宗教的实践は、主に家族単位で行われる祖先祭祀、墓参りが中心となっている。宗教への関心が低いのが、社会主義社会における教育によるものなのか、それともほかの背景によるものなのかについてはさらなる調査が求められよう。上記の中高年女性たちと同様に、大学生たちの認識の中にも仏教や道教、民間信仰が重なっている点があるようにみえる。大学生を男女別に分けてみると、男子学生のほうが宗教に対してより消極的な傾向があるようである。一方、女子学生は男

子学生に比べてより頻繁に宗教的な実践を行っている。こうした違いはどのような背景からくるのかについては今後の課題にしたい。

今回、限られた人数を対象に、比較的短い期間中に行った聞き取り調査のため、莆田市の中高年女性たちの宗教的实践についてもっと幅広く話をきくことができず、十分な事例を集めることができなかった。一方、大学生たちを対象に行ったアンケート調査においては、彼らの宗教に対する考えや実践の大まかな傾向を掴むことができたと思う。

参考資料

中国の大学生の宗教意識・宗教的实践に関するアンケート調査のお願い

私は、京都文教大学大学院文化人類学研究科2年に在学中の鄭星瑶です。現在、「中国東南部における重層信仰—民衆道教と民間信仰を中心に」について研究しています。今回、修士論文作成のために、中国の人々の宗教意識および宗教的实践についての情報を集めたく、大学生を対象にアンケート調査を実施することになりましたので、ご協力いただければ幸いです。

このアンケート調査は無記名で行ない、回答いただいた内容は私の研究のみに使用いたします。

ご協力よろしくお願いいたします。

京都文教大学文化人類学研究科
大学院生：鄭星瑶

*「複数回答可」以外は、回答は一つのみを選んでください。

Q 1 あなたの性別

①男 ②女

Q 2 あなたの出身地を教えてください
() 省 () 市

Q 3 あなたの民族名を教えてください

Q 4 あなたは宗教に関心がありますか

- ①現在、宗教をもっている
- ②宗教をもっていないが、関心はある
- ③宗教をもっていないし、あまり関心がない
- ④宗教をもっていないし、まったく関心がない

Q 5 (Q 4で①を選んだ方に質問します)
現在どの宗教をもっていますか

- ①仏教 ②道教 ③キリスト教
- ④イスラム教 ⑤その他 ()

Q 6 (Q 4で③、④を選んだ方に質問します)
宗教への関心がない理由を教えてください (複数回答可)

- ①宗教に関する嫌な体験があるから
- ②宗教に関する悪い報道を見たから
- ③なんとなく嫌いだから
- ④身近で宗教と接したことがないから
- ⑤宗教の必要性を感じていないから

Q 7 父親の宗教を教えてください

- ①仏教 ②道教 ③キリスト教
- ④イスラム教 ⑤その他 ()
- ⑥なし

Q 8 母親の宗教を教えてください

- ①仏教 ②道教 ③キリスト教
- ④イスラム教 ⑤その他 ()
- ⑥なし

[日頃の宗教的行動について]

Q 9 日ごろの宗教的行動を教えてください
(複数回答可)

- ①年に1、2回程度墓参りをしている
- ②仏や神に花を供えたり、手を合わせた
- りする
- ③縁起物(魔除けやお守り、おふだなど)
を身のまわりに置いている
- ④先祖や亡くなった肉親の霊をまつ
- ⑤この1、2年の間に、おみくじをひいたことがある
- ⑥決まった日に寺/廟などにお参りに、
または教会に礼拝に行く
- ⑦聖書や経典など、宗教関連の本を読んでいる、または読んだことがある

- ⑧このなかで該当するものはない
- Q10 あなたは寺／廟に参拝をしますか
- ①頻繁にする
②時々する
③たまにする
④ほとんどしない
- Q11 (Q10で①、②、③を選んだ方に質問します) 参拝する神々の名前とご利益について知っていますか
- ①よく知っている
②知らないが、とりあえず祈る
③その他 ()
- Q12 (Q10で①、②、③を選んだ方に質問します) 寺や廟では神に何を祈りますか (3つまで複数選択可)
- ①金運 ②健康 ③幸福 ④家内安全
⑤縁結び ⑥学業成就
⑦その他 ()
- Q13 (Q10で④を選んだ方に質問します) 「ほとんど参拝しない」理由は何ですか
- ①宗教に対するイメージがよくない
②神を信じないから
③寺や廟に行く時間がないから
④家族が参拝するため、自分は行かなくてもいい
⑤その他 ()
- Q14 (Q10で④を選んだ方に質問します) 将来、寺／廟に参拝したいと思いますか
- ①思う
②少し思う
③あまり思わない
④まったく思わない
⑤わからない
- Q15 家にある宗教的なものを選んでください (複数回答可)
- ①神棚 ②神像
③亡くなった近親者の写真
④その他宗教的なもの ()
- [宗教に関する考え]
- Q16 「神の存在」を信じますか
- ①信じる
②信じるときもある

- ③あまり信じない
④まったく信じない
⑤わからない
- Q17 「仏の存在」を信じますか
- ①信じる
②信じるときもある
③あまり信じない
④まったく信じない
⑤わからない
- Q18 「靈魂の存在」を信じますか
- ①信じる
②信じるときもある
③あまり信じない
④まったく信じない
⑤わからない
- Q19 死後の世界はあると思いますか
- ①あると思う
②どちらかといえばあると思う
③どちらかといえばあると思わない
④あると思わない
⑤わからない
- Q20 「人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ」と思いますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q21 「神や仏を粗末にしたり、死者の供養をしないと祟る」と思いますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q22 「仏や神を信じて願いごとをすれば、いつかそれがかなえられる」と思いますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない

- ⑤わからない
- Q23「信仰心がある人は、心が豊かだ」と
思いますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q24「信仰をもつことによって、人生の目
標が与えられる」と思いますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q25「どんなに科学が進んでも、人間は信
仰がなければ幸せになれない」と思い
ますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q26「信仰は、死に直面した時の心の支え
になる」と思いますか
- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q27 普段、自分の悩みをだれに相談しま
すか（複数回答可）
- ①家族 ②先生 ③友達 ④恋人
⑤僧侶または神父・牧師・シスター
⑥占い師
⑦インターネット上で相談に回答してく
れる人
⑧その他（ ）
⑨だれにも相談しない
- [宗教に関する意見]
- Q28「宗教的トラブルがあったときに相談
できるような公的な窓口の設置が必要

だ」と思いますか

- ①そう思う
②どちらかといえばそう思う
③どちらかといえばそう思わない
④そう思わない
⑤わからない
- Q29 民間信仰という思い浮かぶ神の名
前を三つあげてください
- ()、()、
()

参考文献

- 窪徳忠
2000 『道教の神々』 平河出版社
- 朱天順
1996 『媽祖と中国の民間信仰』 平河出
版社
- 奈良行博
2000 「中国の祀廟から見る道教と民間
信仰」『アジア遊学 No.16 特集：
東アジアの道教と民間信仰』13-34
- 奈良行博
2011 『中国の吉祥文化と道教—祝祭か
ら知る中国民衆の心』 明石書店
- 聶莉莉
1998 「閩南農村における神々信仰—福
建省晋江市農村での実地調査に基
づいて—」『国立民族学博物館研
究報告』22 (3), 585-659
- 野口鐵郎
2001 『【道教講座】第五巻 道教と中国
社会』 雄山閣出版
- 野口鐵郎・田中文雄
2004 『道教の神々と祭り』 大修館書店
- 三尾裕子
2004 「祀る」『宗教人類学入門』136-148
- 劉枝萬
1994 『台湾の道教と民間信仰』 風響社
- 渡辺欣雄
1991 『漢民族の宗教—社会人類学的研
究』 第一書房

(中国語文献)

李遠国・劉仲宇・許尚枢

2011 『道教与民間信仰』 上海人民出版社

蘭惠英

2018 『古代福建仏教の海洋伝播』 福建教育出版社

林国平

2013 『閩台民間信仰源流』 人民出版社

林国平・彭文宇

2001 『福建民間信仰』 福建人民出版社

林国良

2014 『莆田媽祖信俗大観』 海風出版社

劉福鑄

2014 『莆田史話』 社会科学文献

劉大可

2011 『伝統与変遷：福建民衆の信仰世界』 社会科学文献出版社

黄瑞国

2013 『媽祖学概論』 人民出版社

徐曉望

1993 『福建民間信仰源流』 福建教育出版社

石萬壽

2000 『台灣的媽祖信仰』 壹原出版社

王荣国

1997 『福建仏教史』 厦門大学出版社

参考 URL (年月日は最終閲覧日)

中国一帯一路網「什么是“一帯一路”」

<https://www.yidaiyilu.gov.cn/ztindex.htm> (2018年10月17日)

中国一帯一路網「福建省21世纪海上丝绸之路核心区建設方案」

<https://www.yidaiyilu.gov.cn/zchj/jggg/3141.htm> (2018年10月17日)

百度百科「擲琰」

<https://baike.baidu.com/item/%E6%8E%B7%E7%8F%93/5937873?fr=aladdin> (2019年1月6日)